

# 世界へ「物・事・考え」を伝えるための「平明日本語」

この資料は、知的財産活用研究所の名誉研究員、篠原泰正のレポート、およびブログをもとに編集しております。(2015/03/09 一部改定)

## 「もくじ」

プロローグ(1): 僕はウナギだ、日本語の動詞の曖昧さ

プロローグ(2): 誰がどうした、難しい日本語

- 1・我輩は猫である
- 2・「心技体」、あるいは「心知勇」
- 3・曖昧文書は、日本全体の問題である
- 4・「以心伝心」を期待した曖昧な日本語: 1)～5)
- 5・英国、米国でも続けられている「平明英語」運動
- 6・日本でも始めるべき「平明日本語」
- 7・世界へ「物・事・考え」伝える「平明日本語」
- 8・どのようにして「文明日本語」を書くか
- 9・論理力を身に付け、ロジカルに書く
- 10・世界の共通語は英語
- 11・機械翻訳ソフトの支援が受けられる構造化された「文明言語」で書く
- 12「ありのまま」の表現に適した英語を教材にする
- 13・八代海軍大将、あるいは明治初期の仕様書
- 14・物を見る目、あるいは文章
- 15・日本語教育を見直す必要がある
- 16・英語学習、あるいは日本語文章の学習法

## プロローグ(1): 僕はウナギだ、日本語の動詞の曖昧さ

仲間数人と、ガヤガヤと会社の近くの居酒屋に昼飯を取りに行く。おネエさんに次々と注文の声飛び。

”僕は、ウナギだ”、”俺、カツ丼”。

仲間の中に、日常会話には不自由しない程度に日本語ができる欧米人が交じっていたら、ビックリするだろう。「山田さんは人類だと思っていたのに、ウナギなんですか!」と。そりゃそうだ。「僕はウナギだ」を英語に直訳すると、「I am a eel.」となる。

「僕はウナギだ」が、「僕は (サブジェクト)、ウナギを (オブジェクト)、食べます (動詞)」というセンテンスが変形したものであることは、日本語を母語とする人であれば誰もがわかっていることである。その証拠に、何分か後には、間違いなく、山田さんの前に「うなぎ丼」が運ばれてきた。おネエさんは山田さんが「ウナギ」であるとはみなさなかつたのである。(2005/09/03: 篠原泰正)

## プロローグ(2): 誰がどうした、難しい日本語

カミさんの友人が、おもしろい発明をしたので聞いて欲しい、ということで茶飲み会をした。おぼちゃん同士の話は、あらぬところへ「アッチ、コッチ」と唐突的に飛び。しかしチャンと伝わるころがすごい。

「亡くなった主人の母が・・・」が耳に入った。私は主人が亡くなったのかと取った。お悔やみの言葉を捜しているうちに、亡くなったのはどうも主人の母親であることが判明した。カミさんは日頃からお付き合いをしているので主人の母親が亡くなったことを知っているわけだ。私はその様な背景を持ち合わせていない。

同じ仲間 (村社会) であれば理解できるのであろうが、村人でない私には背景が分からない。私が翻訳したら「亡くなったのは主人です」と訳す。カミさんは「亡くなったのは主人の母親です」と、

正しく訳せる。このように日本語は曖昧で係り受けが不明確である。聞く人、読む人の判断によって意味が異なることが生じる。係り受けの分かり難い文章が「知財文書」にも使われているとすれば、翻訳が難しく誤訳をおこすのは当然である。（発明くん2016/1/12）

## 1・我輩は猫である

わけの分からない手紙を受け取って、猫の主人の苦沙弥（くしゃみ）先生がやたら感心する場面である。

”なかなか意味深長だ．何でもよほど哲理を研究した人に違いない。天晴れな見識だ”と大変賞賛した。この一言でも主人の愚なところはよく分るが、翻って考えて見ると、聊か（いささか）尤も（もつとも）な点もある。

主人は何に寄らず、わからぬものをありがたがる癖を有している。これはあながち主人に限った事でもなかろう。分らぬ所には、何だか気高い心持が起こるものだ。それだから俗人は、分らぬ事を分かったように吹聴するにもかかわらず、学者は、分かった事を分からぬように講釈する。

この名作は百年前に書かれたものだが、これを見ると「分らない文章をありがたがる」性癖は、世間一般において、いまだに受け継がれているようだ。苦沙弥先生が今に生きていて、毎年四十万件制作されている特許明細書の一つを読めば、「これは素晴らしい発明技術に違いない。これを書いた人は学識がよほど優れている。これぞまさしく知的財産だ、本物の「インテレクチュアル・プロパティ」だと感心してくれるだろう。（2006/11/10 篠原泰正）

## 2・「心技体」、あるいは「心知勇」

文書は、読む人に分ってもらおうという親切心が無ければ、結果としては難解なものになる。他者が読んで分からないのは、書き手である自分の責任であると思わず、読む人の能力の問題だと考えている人には、分りやすい文書は作れない。

平明な文書は、まず何よりも、他者に対する「思いやりの心」が無ければ生み出せない。この「心」を持たない人が書いた文書は、読んでいても理解しがたい。書き手の心と態度は文書に現れるのではなかろうか。

明快文書を作りだすための二番目の要素は、頭の中が論理的に整理されており、その展開を明確な文章で表現できる「知力」が必要である。

明快文書を作成するための三番目の要素は、物事をはっきり言い切る「勇気」が要る。特にその言い切った結果の責任を取る覚悟が要る。

このように、明快文書を作り出し、それを公にするうえで、「心技体」ならぬ「心知勇」の三要素を、必須の事項としてあげることができる、と考える。

地球という自然と、世界の人々と、共に生きていくには、自分の責任、相手の責任、自分がなすべきこと、相手がなすべきことを明快に述べた上で共存していくことが必要である。曖昧な湿度（ウェット）の多い関係だけではなく、今後は乾いた（ドライ）関係も築いて行くことが必要となる。（2006-09-03：篠原泰正）

### 3・曖昧文書は、日本全体の問題である

日本語文章という主題の全体を眺めてみると、読んで理解が難しい曖昧な文章は、そこら中にあることに気づく。情感として何らかの感動を与える文章（\*）の世界ではなく、伝えたい事実を正確に理解してもらおう、あるいはこのようにしようという提案を明確に理解してもらおう、あるいはこのように実行しようという計画を理解し受け入れてもらうための文章は、正確さが第一であり読んで支障なく頭に入っていき素直さが求められる。

世界の人々に「物・事・考え」を伝えるためには、好むと好まざるに関わらず、それらを明快に記述する言語を用意しなければならない。

我々日本人は文化を同じくするもの同士であれば、情報の意思の交換に何ら支障もない言語を手に行っている。また、他言語のそれを日本語に転換する上での柔軟性も十分に持った言語を母語として享受している。

しかし、一方において、世界の人々を意識したときに、誰にでも理解できる平明な表現で、ということを行我々日本人は意識してきたであろうか？残念ながら否である。「明快な表現」ということに対して日本人はあまりにも無頓着で努力はされていなかったと思う。

しかし日本語は極めて柔軟性に富んでおりいかようでも組み立てられる言語である。従って、これを論理的な表現に言い換えることは難しくないと考えている。(\*)文学とか哲学の分野でなく対象は自然科学、技術、社会科学に使われる日本語

#### 4.「以心伝心」を期待した曖昧な日本語

新聞やテレビなどの報道にも曖昧さが見て取れる。例えば先の都知事選挙の結果分析について考えてみる。防衛省出身の候補者が若い層に支持を受けていますという報道がされていた。その根拠は 20代が 20%を超えた、30代が 20%近く獲得したということである。数値の根拠をもっと確かなものにするには何か足りないと思わないですか。

不思議なことに 20代、30代、40代、50代・・・それぞれ世代の投票者数、つまり分母がない。しかしこの報道を知らされて多くの日本人は何となく納得する。しかし外国人にとっては理解し難い報道だと思う。知り合いの中国人の指摘はご尤もである。“受け取り側の各自の判断に任せるという解釈範囲の広い日本語はとても難しい”。曖昧な日本語が及ぼす影響を新聞記事から拾った。

##### 1.)朝日新聞の朝刊(記事 2014/01/09)「特定秘密法から考える」

ここで反対、賛成を論じるつもりはない。ただひとつ気になることがある。「秘密法の条文が曖昧なことも国民の不安をまねいた。分かりやすさも大切である」という A 教授の意見に対して、B 教授は「法律にいちいち書かないと理解ができ

ない方に問題がある」という意見である。つまり我々有識者が書いた文章を理解したければ「学」を積みなさい、という風に解釈できる。有識者は「学」の無い者でも理解できる文章を書く責任はないのか、というのが私の疑問である。「読む人の解釈、判断にお任せします」では混乱が広がるだけでなく悪用される危険すらあり得る。

## **2).朝日新聞の朝刊(投稿 2014/04/01)“年金文書、理解しやすくして”**

87歳の母に日本年金機構から通知書が届いた(中略)。高齢の母は表裏9枚の文書が理解できず自分の元に持ってきた。内容をよんで驚いた。とても高齢者が簡単に理解できるような内容でなかったからだ。このような文書が世の中に横行していないか。相手が理解できるかどうかはお構いなしに作成側の言いたいことが長々と、それこそ言い訳のように書き連ねている文書が、だ(中略)。文書は相手側を考えながら作成してもらいたい。作成側の一方通行のような文書は理解を妨げるだけでなく混乱と時間の浪費を招くだけである。

## **3).朝日新聞の朝刊(投稿 2014/04/05)“介護を目指す外国人に門戸広く”**

彼女(外国人女性)は難解な日本語を勉強し、日本人と同じ仕事をこなせるが、それでも試験の壁は厚く不合格であった。外国人受験者に配慮がされていない難しい日本語の試験問題に課題を残しているという投稿である。例えば「床ずれは」褥瘡(じょくそう)と読むらしい。外国人の方へ、褥瘡(じょくそう)について説明せよ、と言っても、そりや無理だ。

## **4).日本経済新聞の朝刊(記事 2008/10/22)“「病院言葉」分りやすく”**

「浸潤」は「ガンが廻りにひろがっていくこと」、「予後」は「今後の病状の見通し」国立国語研究所は10月21日、医療用語を分りやすくするための言い換え例をまとめた。納得いく治療を受けたいのに難解な専門(俗語)が壁になっているとの批判は根強い。放送日は記憶にないがNHKでも取り上げていた。「司法の世界」も「医療の世界」も分り易く「説明する、表現する」ことが求められている。「特許の世界」も明快さが求められる。

## **5).朝日新聞の朝刊(記事2014/10/19)“未消化工事高と手持ち工事高”**

公共事業が材料高騰、人手不足で消化されていない。これを「未消化工事高」と表現するのはイメージが悪い。そこで国土交通省は「手持ち工事高」にして、さも景気が良いように見せて本質の問題の責任を「ボンヤリ」とさせる魂胆が見える。それにしても受けて側(国民)の判断を誤らせることができる日本語の底力は凄い。ただし外国人は“なぜ「手持ち工事高」が増えているのか”を

考える。

◆ 関連レポートのお知らせ：[福島原発事故から学ぶ責任を取らない言語](#)

## 5. 英国、米国でも続けられている「平明英語」運動

もう四半世紀以上も前から、英国と米国で続けられている「平明英語」(Plain English) 運動が、分かりにくい文書の最たるものとして槍玉に挙げてきているのが、法律家 (lawyer) が作成している裁判の判決文であり、また官僚が作成している官公庁の各種フォーム文書である。

この事を知ったとき、日本社会でも英米社会でも、法律家や官僚というのは、どこでも同じなのだと言えやうなことができなかった。違うところは、英米社会では、どのような文書であれ、平明に作成しようという運動が行われているのに、日本では無頓着に難解文書が放置されたままである。

世界の人々に何ごとかを伝えるためには、好むと好まざるに関わらず、論理的に明快に記述する能力を高めなければならない。我々日本人は、この世界の共通事項を論理的に明快に伝えるため、もう一つの日本語を持つことが必要である。

我々日本人は物事を世界へ伝える手段として、形があるもの (製品) で、造形美術や画像 (映像を含む) で伝えてきた。言語でもって他者を説得することが苦手であり、造形美には鋭い感性を持つ日本民族としては、それがきわめて理にかなった戦略でもあった。そのことが世界に誇れるアニメ文化、キャラクター文化を生み出している。

しかし概念、原理、技術、仕組み、システム等々は言語で表現するしかない。少なくとも言語が主であり、図面はその補助である。これらの技術とかシステムは、文明としての存在であるから、言語が異なっても、論理的に表現してあれば伝えることができる。  
(2006/06/20 篠原泰正)

## 6.日本でも始めるべき「平明日本語」

技術は、まさしく文明である。技術の伝播は、それを組み込んだ現物を見ることで、絵（図面）を見ることで、及び言語（聞く、読む）でおこなわれる。その中でもっとも重要な媒体は、明らかに言語である。したがって、記述されている文章が読めなければ、当然その技術は理解できず、その人に伝わらなかった、ということになる。

文明言語であれば文化と民族は異なっても、物を観る方法、考える方法、原理、技術、社会の仕組み、法制、システムなどを人へ伝えることができる。

例えば、目の前に一つの製品、例えば複写機が置かれているとする。この製品を囲んでいる、アメリカ人（イギリス人）、ドイツ人、フランス人、日本人の技術者に対して、それぞれの母語で「この製品は何であるか、記述して説明せよ」という課題が出されたらと仮定すると、日本人技術者のレポートが最も分りにくいという結果になると思う。

なぜだろうか。一言で言えば、日本の技術者は、文章で論理的に事実を説明するのが苦手だからと思う。日本人の特性として、図形で表現することには長けているから、先の課題に対しても、構造図のスケッチを添付せよと言われれば、間違いなく日本人技術者の方が優れているであろう。日本人がグラフィック人間であるとするなら、彼ら欧米人はテキスト人間と言えよう。

日本は製品の生産方法や品質では世界の頂点に立つことができたが、そのことを説明するために必要な「言語」については、誰もカイゼン（改善）に取り組んでこなかった。そのため論理的に記述するには、どのように書くべきかの標準指導書が存在しない。

さらに言えることは、我々日本人は、言語に無神経、あるいはその重要性を認識しないで済んでいる。これは、島国で、日常的に多言語に接しなければならぬ環境にないことが、その要因と考える。日本の外に一步出ると誰も理解できない不明瞭な日本語で、発明か



ら製品まで、生産方法から社会システムまで、記述しているがために、日本国家として、企業として、日本は莫大な損失をしてきているはずだ。(2005/10/19 篠原泰正)

## 7. 世界へ「物・事・考え」伝える「平明日本語」

日本の知的財産を世界に伝えるためには、我々の母語である文化の色合いが強い、日本語は適さないことは分かった。我々日本人はもう一つの日本語、すなわち「平明日本語」を身につける必要がある。

この「平明日本語」を、知的財産活用研究所は「文明日本語」と呼ぶことにしている。我々日本人とは文化を異にする世界の人々に語りかけるための日本語のことである。また、世界の主要言語に無理なく転換できる日本語、すなわち他言語と「互換性」のとれた日本語という意味である。「文明日本語」であれば文化と民族は異なっても、物を観る方法、考える方法、原理、技術、社会の仕組み、法制、システムなどを人へ伝えることができる。

例えば、ハードウェアおよびソフトウェア技術に基づく製品は、他の製品と「互換性」がとられていなければ市場で栄えることはできない。文書の世界においても、そこで記述されている知恵や技術を世界の中で流通させるためには、できるだけ互換性のとれたものでなければならない。

日本語は自分達の創意工夫の上に中国語の助けを借りて明確に記述できる基本体系と要素をすでに有している。従って「文明日本語」の構築は基本的に可能である。「文明日本語」を構築するやり方（方法）も分っている。ある事項について、世界の共通語となっている英語で、どのように記述されているかを分析し、同じ事項に関して、英語文章と同じように、明確に日本語文章でどのように書けばよいかを積み上げていけばよいだけである。

## 8.どのようにして「文明日本語」を書くか

日本語を他言語へ翻訳する場合も、文明言語で論理的に明快に記述されていれば、異なる言語の間での翻訳は、比較的容易な作業となる。

例えば、科学技術の世界において、電気の流れは民族と文化に関係なく、どこにおいても同じ原理で流れるわけだから、どれくらいの容量の電気が、どこで生まれ、何を通して、どこからどこへ、どのようなタイミングで、何のために流されているのかは、英語でも日本語でも正確に同じに記述できる。違いは、使われる文字と、記述の順序と、言葉（単語）だけであり、これらは問題なくそれぞれの言語に転換できるはずである。

では、どのようにして「文明日本語」で書けばいいのだろうか。じつは極めて単純である。英語で記述されている「物・事・考え」と同じ内容を日本語文章で明快に書けるように訓練すれば良いだけである。世界の普遍事項を論理的に明快に書き表すことにおいては、英語が格段に適しており整備されているから、とにかくまねするのが手っ取り早い。

基本的には、かつて製品開発で日本企業が欧米の製品から学んだように、米国企業が取得した明快な「米国特許明細書」をお手本にして、それに対してリバース・エンジニアリングをかけて解体すれば可能である。文書作りにかけては、欧米社会は日本と比べて先へ行っており、まねするのが、もっとも手っ取り早い方法であると考えている。

## 9・論理力を身に付け、ロジカルに書く

論理的文書を作成するためには、二つの要素が欠かせない。ひとつは、論理的に「文書」を構成（展開）することである。もう一つは論理的に「文章」を記述することである。

日本人が作成する文書が英語へ翻訳できない場合が多い。この原

因は、上記二つの要素が適合していないからである。特に文書を論理的に作成するという「建築」訓練を受けていない人が案外と多い。

論理思考で物事をつきつめ、それを論理的に表現する訓練がされていないのに、英語を、勉強しろと迫られても、それは酷な話である。なぜなら頭の中で論理思考が育っていないところに、英語を身につけろと迫られることは、二重の苦難を強いられることになる。そのため、結果としては、英語も身につかず、母語である日本語で論理的に表現することもできない「日本人」がたくさん出てくることになる。

英語を学習するときに、なぜそのような表現方法をとるのか、なぜそのような言い方をするのかを、理解することが基本である。文化としての英語を学ぶなら、話は別である。しかし、文化に密着した言語が簡単に外国語として学習できるわけではない。

## 10・世界の共通語は英語

なぜ英語を学習することが必要かといえ、一つは世界の情報入手するためである。もう一つは事実と当方の考えを世界の人に伝えるための道具が必要と言うだけのことである。この道具を手に入れるには英国、米国の文化と切り離された「オープンイングリッシュ」をまねればよい。そのオープンイングリッシュをまねるには、その前に日本語で論理的に考え、論理的に表現する訓練をしておく必要がある。

オープンイングリッシュ (Open English) とは、アングロ・サクソンの民族的文化や、英国や米国の社会的文化の影響をできるだけ取り払った言語を指すことにする。繰り返して申し訳ないが、英語がその位置を占めるようになったのは、世界の汎用事項を語る必要がある人にとって、共通言語が一つ必要であるという需要が推進力となった。英語はこの需要に応えられる二つの要素を有している。

一つは、自然科学や高度な概念を表現するために、ラテンの言葉を無数に取り入れて、言語としての完成度を高めてきた。もう一つ

は、英国という狭い地域の中だけで発達してきたのではなく、新大陸アメリカにも持ち込まれた言語であること、簡単にいえば、この数百年の間に文化的な臭いが薄められてきた言語である。

つまり文化も民族も異にする人々の間で互いに通じ合うためには、どのようにすれば良いのか、鍛えられてきた言語であるということだ。反面、無味乾燥な言語ということにもなる。

## 11.機械翻訳ソフトの支援が受けられる構造化された「文明言語」で書く

我々は仕事をする上で、メールでの伝達は欠かせないツールとなっている。メールの文章は短く簡潔に、用件だけを書くように教えられている。しかし短い文章であっても、言葉（用語）の位置を入れ替えるだけで、硬い文章が柔らかい文章になることがある。日本人であれば、どんな語順でも行間から読み取って意味を解釈することができる。これが日本語の特徴ともいえる。

一方、英語はその様な柔軟性はない。むしろ「剛構造」ともいえる。そのぶん、味も素っ気もない文章になるが「文才がある、なし」は関係ない。要するに相手に何をして欲しいのか、それを明確に伝えることが大事である。英語は構造的であるから翻訳ソフトの支援が得られる。これはグローバル社会では重要なことである。

例えば日本の井戸掘り技術を世界へ発信すれば真水が不足している世界の人々から感謝されることは間違いない。日本の農業技術もすごいものがある。構造化された日本語で書いて世界へ発信すれば日本の技術は世界中に広がる。なぜなら、これらの技術内容はインターネットの翻訳ソフトで翻訳すれば十分に伝わる。

その地域に必要な技術は、その地域で根付き、多様な形で豊かさをもたらすであろう。翻訳者がわざわざ、意味不明の英語に翻訳する必要はない。オープンな英語（基礎英語）に転換できる構造化された日本語、即ち「文明日本語」で書けば済むことである。翻訳費用をかけずに情報発信ができるから、お金のない中小・ベンチャー

企業にとって、そのメリットは大きい。

## 12「ありのまま」の表現に適した英語を教材にする

技術を分かり易く伝えるのに最も適した言語は英語である。であれば我々は、その英語の利点を多いに利用して、論理思考を学べば論理的に文章を書くことは難しくない。そのことを再度、強く訴えておきたい。

我々日本人は物事を「ありのまま」に、母語である日本語で表現することは苦手であり、またそれを実現するための特別な訓練（教育）も、受けてきていない。もちろんこの作業は西洋人においても楽なものではないようだが、彼らは二つの利点を持っている。

一つは、物事を対象物として、心を動かさず客観的に眺める姿勢が西洋の本質である。もう一つは、それを表現するのに欧州言語が適しているという二つである。さらに、彼らの社会において、エリートとされる人たちは、物事を客観的に観察し、それを言語で表現する力を育てる訓練を受けており、反面からいえば、その能力に不足していればエリートとしての資質と能力に疑問を持たれることにもなる。

他者に自分の考えを理解してもらうためには、その土台となった物事に関して、共通の認識をできるだけ他者に持ってもらうことが必要となる。その共通基盤の上で、初めて、「なぜ、あなたがそのように考えるのかを私は理解した、しかし私はあなたとは異なる考えをそこから引き出す」、と進み、討議がそこで可能になる。

日本人が書いた文書が、一步、海の向こうに持ち出されれば、「あなたは何を言いたいのですか、私は理解できない」と拒絶される可能性がある。海外に出された研究論文や各種仕様書(特許明細書も含まれる)が「意味不明」として、せつかくの内容が取り上げられる前に、玄関口で門前払いを受けるのは実に勿体ないことである。

## 13・八代海軍大将、あるいは明治初期の仕様書

司馬遼太郎さんの「ある運命について」（中公文庫）で書かれている文章を引用する。明治期の軍人の報告書の内容について述べている。

“明治23年、彼がウラジオストックに語学留学していたとき、同地のロシア式暖炉（ペーチカ）に感心し、その構造を広島の知人に書き送っている。八代は明治初年に築地の海軍兵学校に入った。ここで機械を学び、海洋とか気象といったことにちなむ自然科学を学んだ。このことが、同時代の知識人の文学的認識癖からかれを離れさせ、ものごとを写実的にとらえる能力をもたせるにいたっている。

彼はたかが五尺ばかりの暖炉の構造をのべるにあたって、その前に、広大なシベリアを説き、やや縮めて斜面の多いウラジオストックの地形を述べるのである。この地での多くの家屋の基礎は、斜面を平にすることなく、ななめのまま据えられている、とし、ついで家屋構造におよぶ。その叙述の措辞、表現が当をえていて建築家がこれを読めばそれだけでロシア風民家が建てられそうにさえ思えるほどである。八代は文章表現の上での家屋を建ておえてから、ようやく暖炉の位置、構造にいたる“。

これはまさに「ペーチカの仕様書」そのものではないか。シベリア、ウラジオストック、家屋、と全体を描いてから直接の対象である暖炉の記述がなされる。現代の欧米流の仕様書の書き方と同じである。

“散文の持つ一つの機能が、ここではほぼ完全に果たされており、このように、地理学的、もしくは土木建築的な対象をつかみとって読み手に正確につたえる**散文**は、江戸期においては不完全にしか存在しなかった。それを十分に表現しうる文章が、明治二十年代初期において一海軍軍人の私信のなかで成立しているということに、我々はおどろかざるをえない”

明治二十三年（1890年）、今から110年以上前に、司馬遼太

郎さんが驚くほどの正確な状況レポートを日本語で書ける人もいたわけだ。本人の資質だけでなく、自然科学系の学問とロシア語を学んだことが、このような成果を生むことにおおきな力となったことは容易に想像できる。当時は兵学校の勉強はほとんどが英語の教科書でなされたであろうから、八代大将の頭の中には自然に、論理的な組み立てが入っていたのだろう。

しかし、驚きは、思考の展開だけでなく、それを「日本語文章」で表現できているというところにある。（\*）現物を読んでいないので、司馬さんの受け売りだが、間違いはないだろう。

「建築家がこれを読めばそれだけでロシア風民家が建てられそう」とは、まさに仕様書の極意であり、仕様書においては、図面の支援なしに、文章だけでどれだけ読み手の理解が得られるかが、勝負どころである。

100年以上前に八代さんが書くことができたのだから、我々が日本語で明確に、論理的に、「仕様書」を記述できないわけがない。それができていなければ、それはひたすら、我々の怠慢、勉強不足ということになる。（2006/01/30 篠原泰正）

## 14・物を見る目、あるいは文章

司馬遼太郎さんの対談集「東と西」は、読むたびに何かを教えられる貴重な本である。その中に、京都大学のフランス文学の桑原武雄教授との対談がある。「物をその物として見る精神」と小見出しがつけられた話の中で、日本人は物そのものをリアルに記述する習慣がなかったという話から、桑原先生の言：

“ことにイギリス人というのは、物があると、その物はずまらんとか、これは本当の实在だろうかとか、宗教的というか哲学的なことあまり考えないのです。ここにテーブルがあつたら、これは大きなテーブルだ、そこへ白い無地のテーブルクロスが乗っていると、そういうことを精密に書いていくわけでしょう。

日本人も、これはテーブルだということはわかるんです。けれども二メートル余りのテーブルだとか、そういう風には書かない。部屋へ入ったらテーブルクロスをかけた食卓があって、そこへわれわれはゆったりと対座したということで終了です。

つまりこちらは（\*日本人は）景色でも建物でもそれにふれて感情を動かすでしょう、ちょっとオーバーな言い方をすれば、それへの詠嘆、いつもそれが書いてあるんです。”

対象物を自己と対立する客体として、冷静に眺めて描写することができる西洋人。それに比べると、我々はなんせ自然の中に入り込んで、溶け込んでしまう「共生」の心の持ち主だから、対象物と触れ合った自分の心の動きが大事であり、対象物がどのようなものであったか、その事実の描写などは念頭にないわけだ。

さらに、先生は続ける“中国人でも、日本人と違うところがあります。正確に書いている感じがする。陳寿の「三国志」を見ても、簡潔だけど、ちゃんと書いてある”。(2006/12/12 篠原泰正)

## 15・日本語教育を見直す必要がある

理工系大学の英語教育に「米国特許明細書」を教科書として使うというアイデアはいかがであろうか。学生たちは世界の最新技術を日常的に学ぶことができ、発明意欲を掻き立てる姿勢もでてくると思うが。

また学生たちの論理力の無さも問題になっているが、「米国特許明細書」は極めて論理的に構成(展開)されており、その文章は明快で分かりやすく記述されているから、教材として使えば論理力も向上するはずだ。「文明日本語」で表現できるようにもなる。まさに「一石三鳥」ともいえる。



学習科目によって文章の書き方はそれぞれ違うことは誰もが承知している。例えば、理科実験のレポートは「見たまま、ありのまま」を厳密に書くことで情感が入り込む余地はない。社会科のレポートは、与えられたテーマに対して筋道を立てて分析することが求められる。その分析結果に対して自分の考えを正直に述べていくことになる。国語教育は、日本語の読み書きを教える場である。時には文学者の力を借りて、読み手を引き込む「文才」を学ぶこともある。

小中高等学校で、このことを意識した「メリハリ」のある言語教育をすれば、学習科目に合った文章が書けるようになっていくのではなかろうか。因みに大学入試センター試験の国語の問題は、そもそも選択科目（趣味）に位置するものと考えている。難解な文章を解くための勉強では「グローバル人材」は育たない。

## 16・英語学習、あるいは日本語文章学習法

私の手元に、「論文の書き方」（澤田昭夫著、講談社学術文庫）という本がある。その「はしがき」に澤田教授が次のように書いている：

「・・・われわれが自分の考えをまとめて有効に表現するという訓練を日本語でも受けていない・・・」、「工学・技術関係の論文翻訳をしておられる電気通信協会の平野氏によると、同氏のもとに提出される和文論文の中で、そのまま英訳できるのは五パーセントにも及ばず、その理由はそもそも和文の原文がまともに書かれていないことにあるそうです。」

この本は1977年、いまからちょうど三十五年前に書かれているのだが、どうも事態はいっこうに改善されていないと思われる。改善されていれば、私のごとき存在が、いまさら、「論理的に明快な日本語文章を書こうよ」なんて事を叫ぶ必要はさらさらないわけだ。

澤田先生の努力も一般的には実らなかったようだ。版だけは重ねて、私の手元のそれは五十五版を示しているから、多くの読者、つまりなんとかしなければいけないという「需要」は続いていると思われる。

この書籍で大きな改善の波を起こせなかったのは、なるほど教えられていることは至極もったものだが、それでは実際にどう書けばよいのか、訓練の仕方が示されていないことにあるのではないか、考えた。

頭でいくら、そのとおりだ、「論理的に明快に書かねばならない」と承知していても、実際にどうすればいいのかわからないのが現状と思う。手本がなければ、そう簡単に身につく技ではない。またそれ相当の訓練を必要とする。その訓練を、最も論理的に書かれた「米国特許公報」を手本にして行おうとするのが、ここでの提案である。

「[米国特許明細書](#)」の英文を手本にすることは、英語文章の読解の勉強にもなるし、技術の勉強にもなる。また英語で表現する訓練にもなるので、一石三鳥ぐらゐの効率の良さがある。この方法であれば、一つの「物・事・考え」を英語と同じように、日本語でも正確に明快に表現できるはずである。

日本には、これからの世界が必要としている数多くの知的財産がある。それらを明快に表現して発信できなければ、せつかくの宝も埋（うず）もれたままに終わってしまう。

[論理的な文明日本語](#)で明快に技術やシステムを記述し、できれば、それを明快な英語に翻訳しておく。その英語文書をインターネット上で世界に公開すれば、日本と日本人への評価はうなぎのぼりとなるはずだ。

日本の知的財産を世界に向けて発信していけば大きな国際支援を提供することになる。企業だけでなく国も自治体も自分たちが持つ知的財産を棚卸しする価値はありそうだ。(2007/01/08 篠原泰正)

- ◆ [関連ブログの紹介：日本人としてのアイデンティティを失うな](#)
- ◆ [関連ブログの紹介：「名こそ惜しけれ」日本の美学の核](#)